

第2部—第5章. 近代化が進む日本と東アジア

① 新政府の誕生

<新政府による中央集権化>

- 1868.³ 五箇条の誓文 ……明治天皇が神々に誓約、新政府の基本方針 → 明治維新
- 1869 版籍奉還 ……旧藩主が領地（版＝地図）と領民（籍＝戸籍）を天皇に返上
改めて旧藩主を知藩事に任命して旧領地を治めさせる
- 1871 廃藩置県 ……藩を廃止し、旧藩主は東京に居住させる
全国を府・県に分け、中央政府が任命した府知事・県令が地方行政
- ※ 藩閥政府 の成立 ……薩摩、長州を中心とする武力討幕勢力が新政府の中心に
ただし官僚には旧幕府方の人材も多く登用

<「日本国民」の創出>

- ▶ 四民平等 …… 士農工商の身分制度は廃止、職業選択の自由、全国民が名字を名乗る
⇔ 新たに華族（公家・大名・維新の功臣）・士族（旧武士）・平民（農工商）
- ▶ 税制改革
- 1872 戸籍法（壬申戸籍） ……全国民を登録、上記3身分も明記させる
江戸時代の「えた・非人」も平民に繰り入れるが差別は続く
- 1872 地価を定めて 地券 を交付、土地所有権の明確化 ← 田畑永代売買の禁令を廃止
- 1873 地租改正 ……地券の所有者に地価の3%の地租を金銭で納税させる
- ▶ 教育制度 1872 学制 ……6歳以上のこどもに教育を受けさせる義務
- ▶ 軍事制度 1873 徴兵令 ……20歳以上の男子に兵役の義務（軍隊の国民化）

<岩倉使節団とその影響>

- ▶ 1871 岩倉使節団 ……岩倉具視、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文ら
女子留学生も派遣（津田梅子ら）
不平等条約改正については全く相手にされず
約2年欧米を視察 → 近代化の必要を痛感、表層的な文明開化を反省
- 1873 使節団帰国 ……留守政府の西郷隆盛・板垣退助らが主張する征韓論を退ける
→ 西郷・板垣らは政府辞任 → 板垣は自由民権運動へ
江藤新平は佐賀の乱
- ▶ 不平士族問題
華族・士族には家禄を国庫から支給、財政圧迫（支出の30%）
↓
- 1876 秩禄処分 ……禄高に応じて公債証書を付与
華族は1人平均6万円 ……これなら会社・銀行などを作れる
士族は平均415円 ……これを元手に「武士の商法」 → 失敗
- 1876 廃刀令 → 不平士族の反乱勃発（神風連の乱、秋月の乱、萩の乱）
- 1877 西南戦争 ……西郷隆盛ら旧薩摩藩士らの反乱
徴兵制による新政府軍がこれを鎮圧
- ※以後、言論による政府批判、自由民権運動活発化

② 近代国家を目指す日本

<立憲体制への道のり>

▶ 自由民権運動

①. 士族民権

1874 民選議院設立建白書…… 板垣退助らが政府に提出

1875 漸次立憲体制樹立の詔 発布……元老院・大審院・地方官会議を設置
一方、讒謗律・新聞紙条例で言論弾圧

②. 豪農民権

1880 国会期成同盟 結成 ←板垣が結成した愛国社から発展
国会開設請願書を政府に提出
→政府は集会条例で集会結社を制限

1881 開拓使官有物払下げ事件
開拓使長官黒田清隆が同郷の五代友厚に官有物を安く払い下げようとしている、と
民権派が薩長藩閥政府を批判 →払い下げ中止に

→ 明治14年の政変 …… 伊藤博文を中心とする藩閥政府は、
民権派に通じているとして大隈重信を罷免

// 国会開設の勅諭 ……政府は1890年の議会開設を目指す、と表明

▶ 政党の結成 ……自由党（1881、板垣退助）、立憲改進黨（1882、大隈重信）
民権派による私擬憲法作成も活発化

<憲法発布と帝国議会>

1882 伊藤博文、ヨーロッパへ憲法調査。主にドイツの欽定憲法を学び翌年帰国

1885 内閣制度 ……初代内閣総理大臣 伊藤博文 憲法草案作成

1889 大日本帝国憲法 制定 …… 欽定憲法、天皇の統治権・統帥権

1890 帝国議会 開設 …… 貴族院・衆議院の二院制
衆議院の選挙権は25歳以上の男子で直接国税15円以上の納入者（国民の1%のみ）

▶ 民法典論争

1890 民法 制定……フランス人法学者ポアソナードが起草

⇔ 「民法出デテ忠孝滅ブ」（穂積八束）などの反対

1898 新たな民法が施行……家父長権が強い

<日本の国境画定>

▶ 北方

1855 日露和親条約（幕末）……千島列島は択捉島まで。樺太は日露両国民雑居。

1875 樺太千島交換条約 ……千島列島はすべて日本領、樺太はロシア領

▶ 琉球問題

江戸時代、琉球王国は薩摩藩に支配されていた一方で、清へも朝貢

1872 日本、琉球国王を藩王とし琉球藩設置

1874 日本、台湾出兵……71年、台湾に漂着した琉球人が虐殺されたことを理由に

1878 琉球処分……琉球藩を廃して沖縄県を設置

③ 日本と清の近代化と日清戦争

<産業革命の始まり>

- ▶ 殖産興業 ……明治政府は、**生糸**・絹織物、**綿糸**・綿織物をその中心に位置づけ
 - ・製糸業…… 富岡製糸場 設立(1872) ←フランスからの“お雇い外国人”技術者
 - ・紡績業…… 大阪紡績会社(1882) ←イギリスの機械導入
のち、豊田佐吉による自動織機など独自の技術革新も
- ※ 渋沢栄一 (1840-1931) ……日本資本主義の父、500以上の会社設立に関わる
第一国立銀行、東京証券取引所、東京商工会議所
- ▶ 富国強兵 ……輸出で得た外貨で欧米から戦艦も購入

<清の近代化政策>

- ▶ 洋務運動 ……1860年代後半から西洋技術を導入
太平天国の鎮圧に功績があった漢人官僚 **李鴻章** らが中心
日本の明治維新と異なり、政治体制の変革は伴わず
- ▶ 外交……アヘン戦争以後、西洋近代的外交に巻き込まれていたにもかかわらず
旧来の「冊封体制」的外交から脱却できず、朝鮮などを属国と見なし続ける
- 1875 日清修好条規 ……日本とは対等条約締結

<朝鮮の開国と混乱>

- ▶ 朝鮮王国……清の属国としてふるまい、貿易統制継続
- ▶ 日本 ……朝鮮にの清からの独立・開国を要求 → 征韓論
- 1875 江華島事件 ……日本海軍が朝鮮沿岸で演習、これに朝鮮が発砲
→ 日朝修好条規 ……日本有利の不平等条約を締結し朝鮮を開国させる
以後、閔妃政権は日本に接近
- ▶ 朝鮮国内の対立……親日派（開化派）vs 親清派（保守派）
- 1882 壬午軍乱 ……大院君ら保守派のクーデタ → 日清両国が出兵
清が大院君を監禁し閔妃保護 → 以後、閔妃政権は親清派に
- 1884 甲申政変 ……親日派の金玉均らがクーデタ、日本もこれを援助
しかし清の出兵によりクーデタ失敗

<日清戦争と東アジアの変容>

- 1894 甲午農民戦争 ……朝鮮における農民反乱
日清両国軍で農民反乱鎮圧、その後も撤兵せず両国開戦
- 1894-95 日清戦争 ……日本勝利
- 1895 下関条約 ……清は朝鮮の独立承認
日本に賠償金支払い、台湾・遼東半島などを割譲
- ⇓
- 〃 三国干渉 ……ロシア・フランス・ドイツが、日本に遼東半島返還を要求
日本はこれに従わざるを得ず
→ 1898年、ロシアは清から遼東半島南部の租借権獲得

※ 清は属国にしていたヴェトナム・朝鮮・琉球などを失い、冊封体制は崩壊

④ 列強の中国進出と日露戦争

<清朝の政治改革の試み>

- ▶ 変法運動・・・ 1898年、光緒帝の支持のもと、康有為らを中心に改革
 - ⇔ 戊戌の政変・・・同年、西太后を中心とする保守派が改革派を弾圧、光緒帝幽閉
- ▶ 列強による中国分割・・・西洋諸国は日本に敗北した清を半植民地化



- 1900 義和団事件・・・「扶清滅洋」を掲げる義和団が北京の外国公使館区域を包囲
清朝政府もこれを受けて諸国に宣戦布告
しかし、日本・ロシアを中心とする8カ国連合軍に敗北
- 1901 北京議定書・・・清は列強の北京駐兵、多額の賠償金支払いを認める

<日露戦争>

- ▶ ロシア・・・義和団事件以後も満州から撤兵せず、朝鮮へも勢力をのばす
朝鮮（1897大韓帝国）・・・日清戦争後の日本支配を嫌ってロシアに接近
フランス・・・1891露仏同盟
ドイツ・・・露仏に挟まれているため、ロシアにはアジアに専念してほしい
- ▶ 日本
 - 1902 日英同盟 締結
イギリス・・・ロシアの南下政策を阻止したい
一方、ドイツに対抗するため、日露開戦と同時に英仏協商締結
 - 1904-05 日露戦争・・・日本は全力投入で軍事的勝利するも国力消耗
一方、ロシアは第一革命勃発で戦争続行不能に
 - 1905 ポーツマス条約・・・アメリカ大統領セオドア・ローズヴェルトの仲介
日本は露から、南樺太の割譲、遼東半島南部の租借権、南満州鉄道を獲得
ただし賠償金は無し → 国民の不満、日比谷焼き討ち事件

<日本の条約改正と産業革命の進展>

- ▶ 条約改正・・・幕末に結んだ不平等条約改正
 - 1894 イギリスとの間で領事裁判権撤廃（外相 陸奥宗光） → 1899 全廃
 - 1911 アメリカとの間で関税自主権回復（外相 小村寿太郎） → 同年全廃
- ▶ 重工業
下関条約の賠償金・・・重工業・軍備に
 - 1901 八幡製鉄所 操業開始・・・国内のみならず中国の炭田・鉄山から原料供給
鉄道・戦艦の国産化
- 企業集中も進む・・・財閥の成長

⑤ 日露戦争が与えた影響

<日露戦争の世界への影響>

- ▶ “アジアの小国”日本が、“ヨーロッパの大国”ロシアに軍事的勝利
ロシアに支配されているフィンランド、圧迫を受けるオスマン・トルコ帝国、
西洋諸国に植民地支配されているインド・ヴェトナム・中国などの民族独立運動に刺激
- ▶ まもなく日本への失望
ヴェトナム……ファン・ボイチャウによるドンズー運動（東遊＝日本留学）
しかし日本はヴェトナムを支配するフランスに配慮し、留学生を国外退去処分
- ▶ 第一次世界大戦に向けての国際関係の変化
 - 1904 英仏協商 ……日露戦争開戦とともに
日英同盟・露仏同盟はあるが、英仏は日露戦争に介入せず
来たるべきドイツとの戦争に備える
 - 1907 英露協商 ……日本に敗れたロシアはもはやイギリスの敵ではなくなる
イランでの両者の対立を調整し、ドイツとの戦争に備える
↓
三国協商（イギリス・フランス・ロシア）＝ドイツ包囲網完成

<日本の対外進出>

- ▶ 朝鮮 …… 3度にわたり日韓協約、日本が韓国外交・内政に干渉
⇔ 1907 ハーグ密使事件 ……韓国皇帝がハーグ万国平和会議に日韓協約無効を訴える
- 1910 日本、韓国併合 …… 朝鮮総督府 設置
- ▶ 満州
日露協約……日本は南満州、ロシアは北満州を支配
南満州鉄道……アメリカからの共同経営を断る →対米関係悪化

<清朝の崩壊と辛亥革命>

- ▶ 孫文（1866-1925）…… 三民主義（民族独立、民権伸張、民生安定）を説く
1905 中国同盟会 結成 …… 華僑を中心とする革命勢力結集
- ▶ 清朝 …… 1905 科挙廃止、1908 憲法大綱発表
しかし1911年、幹線鉄道国有化によって外国借款を受けようとする
⇔ 外国から利権を回収しつつあった中国人資本家の反発
- 1911 辛亥革命 勃発 ……14省が清から独立
- 1912 中華民国 建国 ……臨死大総統 孫文、首都 南京

<分裂の続く中国>

- ▶ 清朝 …… 袁世凱 を総理大臣に登用し事態打開を図る
袁世凱は革命派と交渉、清を滅ぼす見返りに大総統の地位を要求。革命派もこれに応ずる。
- 1912 宣統帝退位、清滅亡
- 1913 孫文らが結成した国民党を解散させ、袁世凱大総統による独裁
- 1916 袁世凱、皇帝になろうとするが内外の反対で挫折・死去
→以後、中国は軍閥が各地に乱立、分裂・混乱の時代へ